神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A Memoir--First Ten Years as a Teacher

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益岡, 隆志, MASUOKA, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2072

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

回想—教えはじめた頃

益岡　隆志

神戸市外国語大学の退職に際し、何か文章を寄せるようにとのお話をいただきましたので、拙いものですが、大学院を終えて大学で教えはじめた頃からの 10 年間を思い出しながら短文を綴ることにします。

私は 1976 年に大阪外国語大学大学院外国語学専攻（修士課程）を修了し、その年の 10 月、恩師の林栄一先生のご尽力で大阪産業大学教養部の助手に採用されました。学部 1 ・2 年生に英語を教えることで教師生活を開始したわけですが、修士課程を終えてすぐ教えはじめることになったため、準備不足もあり誠に頼りない教師でした。それでも、当時の学生たちはこの頼りない教師に付いてきてくれたので、何とか教師生活を続けることができたのです。

また、幸運だったのは勤めはじめて 3 年目に半年間研究休暇をもらったことです。この研究休暇の半年間、林先生にお願いして大阪外国語大学で過ごしました。林先生にはそれ以前から海外留学を勧められており、大学院の先輩方（西光義弘氏や影山太郎氏）が多数アメリカの大学院に留学されていたこともあって、この機会にアメリカ留学の可能性を探ろうと、1979 年の 2 月、アメリカ西海岸の大学院（言語学）をいくつか訪問してみることにしました。カリフォルニア大学バークレー校、ロサンゼルス校などを訪問し留学意欲をかきたてられたことが思い出されます。それでも、長期間日本を離れる決心がつかず、留学は実現しないまま幻に終わってしまいました。あの時決心していればその後違う人生を過ごすことになったであろうという気持ちは、今でもあります。

アメリカ留学の可能性を探っていたこの時期、転機は別の形で訪れました。その転機とは、神戸市外国語大学（以下、「神戸外大」）で教える機会を得たことです。たしか研究休暇が終わる頃だったと記憶しますが、神戸外大におられた高原脩先生から、日本語学の担当教員を募集することになったというお話を伺いました。ちょうどこの時期、日本語を分析対象の言語にできればと考えはじめていた私は、林先生に神戸外大への応募についてご相談しました。林先生から応募してみてはというお話がありましたので、思い切って応募したところ、幸運なことに、1979 年 10 月付で採用していただけることになったのです。

授業の担当は 1980 年 4 月から始まったのですが、日本語学を担当しはじめてすぐにぶつかった課題は、(当然のことではあったのですが) 日本語研究への幅広い理解を深める必要性でした。日本語学が新設科目だったこともあり、どのように授業を展開すればよいのか、最初の数年間は手探りの状態が続きました。そのような時、私を支えてくれたのが当時の学生たちの熱意でした。日本語学担当者として未熟な私でしたが、学生たちは私の拙い講義にじつに辛抱強く付き合ってくれました。なかには、私と一対一での読書会をしてくれた学生さえいたのです。ちなみに、いっしょに読んだ書物は John Anderson 著の *The Grammar of Case* でしたが、学部生とこのような読書会ができたことは、今から思えば大きな驚きです。その後も学生に恵まれ、有志の学生たちとの勉強会なども実現しました。

そうした恵まれた教師生活を送るなか、私の日本語研究のほうも少しずつ歩を進めることになりました。担当の日本語学では、文法を主な対象とする科目と音声・音韻を主な対象とする科目を教えていました。音声・音韻は専門的に研究したことがなかったのですが、幸い、修士の時代とその後しばらくのあいだ研究会などで音声学・音韻論を少し勉強していましたので、それをもとに講義の構成を考えました。林先生が監訳された『音韻論総覧』(エーリ・フィシャ＝ヨーアンセン著) の翻訳の一部を担当したことも大きな助けとなりました。音声・音韻を本格的に勉強することはその後もありませんでしたが、この分野に対する関心は現在まで持続しています。

文法のほうは、日本語学を担当して以来、私の専門分野となりました。教えはじめるまでは、当時の新言語学の潮流を背景として、日本語を対象とする理論言語学的な研究に関心を持っていました。神戸外大赴任の少し前になりますが、当時大きな話題になっていた文法関係 (grammatical relations) を扱った “Remarks on grammatical relations in Japanese” (*Nebulae* vol.4, 1978 年) や “Double-subject constructions in Japanese” (*Papers in Japanese Linguistics* vol.6, 1979 年) などの論文を執筆していました。

そこで、文法を主な対象とする科目では、当初こうした方向性で講義を組み立ててみたのですが、受講生は言語学に興味のある学生ばかりではなかったことから、しばらくして、日本語の具体的な文法現象を観察することに重点を置く内容に切り替えました。この切り替えが功を奏し、私の講義はどうにか軌道に乗ることになったのでした。

しかも、この方向転換は後に幸運な結果をもたらします。この時期続けていた講義の内容をもとに、日本語文法の概説書 (参考書) を書くことを思い立ち、当時神戸大学で教えておられた田窪行則氏といっしょに『基礎日本語文法』(く

ろしお出版）を執筆しました。この概説書は 1989 年に初版が出たのですが、幸い多くの読者に受け入れられ、現在まで多くの版を重ねています。このように長く版を重ねられたことは著者冥利につきますが、この概説書のもとになったのが神戸外大での日本語学の初期の講義だったことが、今では懐かしく思い出されます。当時、日本語学を受講してくれていた学生たちのことも（名前は思い出せないのですが）よく覚えています。

自分では決して教師に向いていないと以前から認識しているのですが、そうした私を支えてくれた神戸外大の学生の皆さんに、心からなる感謝の意をささげたいと思います。

2016 年 6 月 5 日記